

内閣総理大臣賞受賞

世代を超えた固い絆が拓いた森・命のまきば

受賞者 おおのがはらかいたくくみあい
大野ヶ原開拓組合
えひめけんせいよし
(愛媛県西予市)

■ 地域の沿革と概要

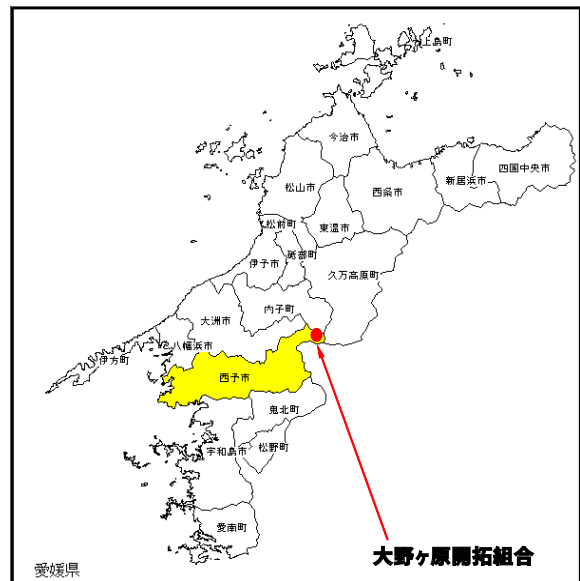
愛媛県の南西に位置する西予市は、平成16年4月1日に旧宇和町、明浜町、城川町、三瓶町、野村町の5町が合併して誕生、面積は約51km²、人口約43,000人（平成21年）である。同市は、西はリアス式海岸の宇和海に面し、中央部の平坦な宇和盆地を挟み、大野ヶ原のある急峻な山間部で構成される東部地区まで東西約49kmの細長い地形であり、標高も0～1,400mと起伏が激しく、地区により気象条件も変化に富んでいる。主要産業は農林水産業であり、農業産出額は120億円を超え（平成18年）、愛媛を代表する温州みかんをはじめとする各種柑橘類のほか、水稻や栗、いちご、畜産（酪農、肉牛、養豚、養鶏）や魚介類など、四国一ともいえる多品目産地でもある。特に西予市は、県内有数の酪農地域となっている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

「大野ヶ原開拓組合」が活動する西予市野村町大野ヶ原地区は、西予市の最東部、標高1,400mの山間部に位置し、石灰岩の奇石が草原に乱立する四国カルスト高原にある。年間平均気温は9～10℃（最低気温-9.4℃）で、冬季は例年で20～50cm、多い年には2.5mの積雪が3ヵ月続くこともある。また、同地区は公共交通機関が通じて

第1図 位置図



※ 白地図 KenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落(1集落)
地区の性格	機能的な集団
農 家 率 (内訳)	62.1 % 総世帯数 29 戸 農 家 数 18 戸
販売農家数 (内訳)	17 戸 専業農家 11 戸 1種兼農家 6 戸 2種兼農家 ー 戸
主要作物 (農業産出額)	酪農 (264百万円) 肉牛 (137百万円) 花き類 (11百万円)
農用地の状況 (内訳)	耕地計 136 ha 畑 22 ha 樹園地 1 ha 牧草地 113 ha 耕地率 農家一戸当たり農用地面積 8.0 ha

おらず、西予市中心部まで1時間30分、県都松山市までは現在でも2時間30分はかかる交通不便地域であり、積雪のため路面が凍結する冬季は「陸の孤島」となりかねない。地区の総面積の90%以上は森林であり、耕地面積は136ha。

主要作目については、冷涼な気候を生かし、畜産を中心に、花き及び野菜（大根）栽培が行われている。地区の総世帯数29戸、うち農家数は18戸で認定農業者は16名。40歳未満の農業従事者は19名と後継者も確保されている。また、地区の高齢化率は13%と低い。西予市内の小学校が統廃合されるなか、大野ヶ原小学校

では在校児童が10名程度おり、今後も入学児童が見込まれることから、平成20年には校舎が新築されるなど、若年齢者の占める比率が高い健全なむらづくりが進められている。



写真1 大野ヶ原地区の概況

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

大野ヶ原地区のむらづくりは、戦後の開拓に始まる。入植以前の地区は、カラマツやクマザサの原野であった。人の進出を阻んできた大野ヶ原につちの音が響いたのは敗戦の翌年。昭和21年に開拓増産隊員15名により、標高1,400mにおける適作試験や気象観測などが始められた。

昭和23年に農林省委託実験農家として7戸が入植。現在の大野ヶ原開拓組合の元である「大野ヶ原開拓農業協同組合」が昭和24年に設立された。



写真2 昭和30年代の共同防除

昭和25年には、農林省から開拓地として正式に認可が下り、第1次入植農家として30戸が入植し、開拓営農は自分たちの住む家を作る事から始まった。当時の住居は板を打った外壁に杉皮屋根、ランプと囲炉裏という簡素なもので、冬季には寒風と吹雪が隙間をぬって入り、朝起きれば布団の上に雪が積もり、釜の飯もカチカチに凍る有様であった。入植当初の交通手段は主に“徒歩”であり、生活必需品購入のために商店へ赴くにも30km先のバス停まで歩かねばならず、食糧不足から住民の多くが栄養失調に陥った。

また、当地区には医師がおらず、病気の際には背負って診療所まで連れて行くが、高齢者や幼児など医師のもとに着いた時には既に時遅く、尊い命が失われるといった事例も数々あった。第1次入植以来、一時は予定者を含め100戸にまで及んだ地区の農家も、こうした悪条件に加え、長雨、冷害、風害等の厳しい自然条件によって多数の離農者を

出した。

昭和27年6月の長雨は40日間降り続き、農作物はもとより野草に至るまで疫病で真っ黒になり、わずかにヒエだけが収穫できた。昭和28年には台風が3回連続で来襲し甚大な被害をもたらした。農家は残っていた食糧を分け合い生き抜いた。

昭和37年暮れから連日雪が降り続いた「三八豪雪」時には、家屋や学校も雪の中にすっぽりと埋まり、町へ下りる道も閉ざされ完全に孤立。県がヘリコプターを出して空から食料補給を行った。また、生活の糧である酪農は毎日の搾乳と出荷が必要となるが、集乳車が地区に出向くことができないため、男性は2斗缶(60kg)、女性も1斗缶を背負い、吹雪の中、6km先の集落まで運んだ。それでも出荷できない牛乳は、毎日搾っては捨てなければならず、精神的な苦痛は耐え難いものであった。

こうした苦難を乗り越え、入植以来60年、大野ヶ原は一つの家族のように助け合い、励ましあい、今日では県下有数の酪農地帯に成長した。これは国策を信じて入植した彼らの「食糧増産を図る」という強い使命感の表れでもあり、また、「働いて働いて尚働いて成せば成るの開拓魂」が後押しした結果でもある。

現在もその精神は、畜舎の改修や冠婚葬祭時の搾乳、お祭り等のイベント時において団結力を再認識し、「協働」、「助け合い」の精神が世代を超えて受け継がれている。

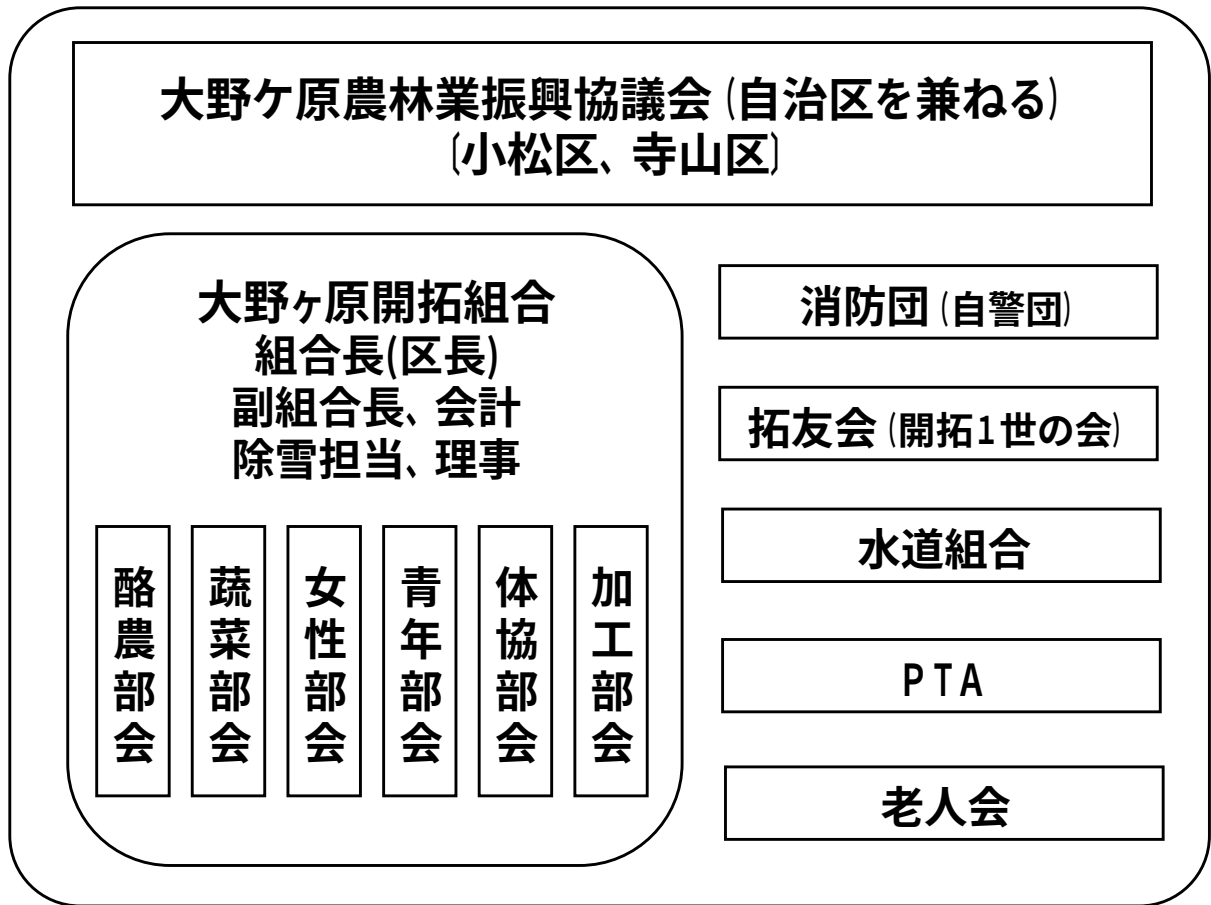
(2) むらづくりの推進体制

昭和24年に設立された「大野ヶ原開拓農業協同組合」は、営農や生活事業を中心に活動していた。昭和44年の開拓行政の打切りに伴い、開拓農協は野村町農業協同組合の下部組織となり、平成17年からは、「大野ヶ原開拓組合」と名称変更、任意組織とし、住民相互の連携と協調を図るため、地域的な共同活動を行う組織に生まれ変わった。

集落の自治区を兼ねる大野ヶ原農林業振興協議会の区長は開拓組合の組合長が兼務しており、営農と生活面の一体的な活動がなされている。開拓組合が中心となり、消防団、拓友会（開拓1世の会）、PTA等、集落内組織と連携を図りながら開拓祭、龍王神社大祭、高原祭、小学校・地区住民合同運動会などのイベントや各種行事を実施している。

各種行事は住民総ぐるみで実施されており、開拓組合の総会と同日に開催される開拓祭にも小学校の先生から、子どもを含めた地区住民が全員参加している。

なお、開拓組合では、入植以降、電気の導入、農道、水道の整備を始めとする諸事業を実施してきた。現在も、冬季の除雪作業を西予市から請け負っており、収入は地区の自治活動の財源ともなっている。



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

「開拓とは最低の生活から最高の文化を築くこと」(開拓1世の武田氏)とあるように、大野ヶ原における開拓の歴史は、むらづくりの歴史そのものである。想像を絶する困難・試練に「大野ヶ原開拓組合」が中心となり、入植者は理想を求め、開拓者魂と奉仕の精神、たゆまぬ努力でカルスト高原・酪農の里の礎を築いてきた。自然と共生しつつ、生活と営農が一体となって生きていくことが、地域の生活スタイルとなり、地域全体が家族のように暮らすなか、相互扶助の仕組みができていく。また、若い人は年配者に対し尊敬と感謝の念を持ち、開拓1世も2世、3世の自主性を尊重している。

現在の大野ヶ原地区は、開拓1世の築いた基盤の上に2世、3世が継承・発展をさせるとともに、世代を超えた地域の絆が、息づく地区である。



写真3 開拓碑と大野ヶ原地区の人々

２．農業生産面における特徴

(1) 大野ヶ原大根の産地化

昭和30年代、厳しい自然環境のなか、試行錯誤を経て、冷涼な自然環境条件にあった夏秋大根が導入された。夏秋大根は他産地の端境期（８～10月）に生産・出荷され、販売の一元化など産地化に取り組み、夏場のブランド産品「大野ヶ原大根」として定着している。また、大野ヶ原大根を求め地区を訪れる観光客等のリピーターも多い。

(2) 酪農産地の継承・発展

開拓1世は、地区の恒久的な安定経営を図るため、昭和34年に乳牛を導入した。導入にあたっては全戸が家で育成していた和牛を換金して購入資金を作り、京都府丹波地方から乳牛40頭を買い付けた。

その後、乳牛の技術指導や草地改良等の取組を進め、地区の酪農の基盤を作った。開拓2世により、牧草による自給飼料をベースとした適正規模かつ低コストでバランスのよい持続的な酪農経営が確立されている。平成7年には大型機械を共同利用してロールベールサイレージにする生産体系が確立さ



写真４ ロールベールサイレージ体系の確立

れ、高品質粗飼料の通年給与が可能となった。1戸あたり8～10haの牧草地を基盤とする愛媛県下では比較的規模の大きい酪農経営（30～50頭）が実践されている。大型機械化体系の確立や公共育成牧場の利用により、余暇が確保され、後継者対策にもつながっている。

現在、当地区は県生乳量の13%を生産する県下有数の産地となり、「四国カルスト高原牛乳」としてブランド化が図られている。

平成19年には、堆肥施設や尿排水処理施設を導入し、糞尿はすべて堆肥化する地域内循環システムが確立されている。堆肥は牧草や野菜栽培に利用され、土づくりの推進と購入肥料代のコスト低減を図るとともに、環境と調和した農業が営まれている。

(3) 開拓3世による新たな取組

平成10年から高原の冷涼な気候を利用して、2戸が花き（デルフィニウム）栽培を行っている。北海道以外の産地が出荷できなくなる端境期の6～10月に出荷し、有利販売を行っている。特に、高冷地で栽培しているため、草丈が長く、花の色が鮮明であることから市場での引き合いが強い。また、平成13年からは2戸が黒毛和種の一貫経営を開始している。粗飼料の割合を高めコストダウンを図るとともに、徹底した飼養管理による高品質生産に積極的に取り組み、「絹の味」としてブランド化が図られている。

現在、地区にはUターンした開拓3世が16名いるなど、経営基盤の確立と地域の絆があいまって、全農家で後継者が確保されている。また、5年前、地区の青年たちが自主的に青年部を立ち上げ、Uターン者の受け皿としての活動を行っている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 地区住民の結束力でブナの原生林を守る

大野ヶ原は標高1,400mに位置し、通常であれば水の確保が問題となるが、この地は保水力のあるブナのおかげで水に恵まれている。地区の生活用水や牛の飲水等の農業用水はブナの原生林を水源としている。大野ヶ原に存在するブナの原生林は日本南限であるとされ、日本北限の北海道黒松内町と姉妹都市交流を行っている。昭和63年に地区の生活・農業用水に不可欠な水源近くまでブナの原生林の伐採が進んだ。このとき、地区住民の間に、これ以上進展すると水源の涵養機能や貴重な自然環境が失われるとの意識が高まり、地区住民全戸参加による「大野ヶ原ブナ原生林を守る会」を発足した。

日本自然保護協会等とも連携し、県等関係機関への要請や1万人を超える署名活動等を通じた粘り強い反対運動を展開した結果、伐採計画は中止され、ブナの原生林は守られた。

この活動を通して住民の一体感が醸成されるとともに、自然保護に対する住民意識が芽生えた。現在も遊歩道の整備や自然観察会を行うなど、自然保護活動が続けられている。

(2) 景観の保全と観光客との交流

開拓組合の女性部、青年部や拓友会が中心となって、開拓当初からあるツツジ園の管理、平成5年から地区の美化活動や花いっぱい運動を行っている。

近年、手つかずの自然景観や高原の涼を求めて訪れる観光客が増加していることから、酪農家の女性を中心となって牛乳、アイスクリームやケーキなどの加工品を作り販売している。龍王神社の大祭や高原祭等のイベントのほか、開拓2世の経営によるペンションやレストランを中心に観光客との交流活動が行われている。



写真5 冷涼な気候を生かした花き栽培



写真6 牧草地の向こうに広がるブナの原生林

(3) 地域の結束力の継続

小学校・地区住民合同運動会などの行事には、地区住民全員が参加している。

豊かで奥深い自然の中、若い人も子どもの頃から、農作業や地域行事を通じ地域の一員として深く関わっている。毎年4月に開催される開拓祭は4世代の交流の場となっており、入植時の苦労や将来の夢などが語り合われ、子どもを含め家族や地域で価値観の共有が図られるとともに、世代を超えた地域の結束力が高められている。

地区には、小学校しかなく、子どもたちは中学入学と同時に親元を離れ寮生活を強いられるが、一度は地区を出た子どもたちが成人して戻り家を継いでいる。

地域の絆・結束力が、地区農業の発展や後継者確保に実を結んでおり、「開拓者魂」は確実に次世代に受け継がれている。



写真7 高原祭でのふれあい活動



写真8 4世代が集う小学校・地区住民合同運動会